

【元結】もとゆひ

先ごろ、茶友から明治時代の某数寄者の手になる茶杓を拝見させて戴きました。

順樋・浅い蟻腰・やや細め・面取の切止。行に削られた筒には花押があり「元結」という銘が手慣れた筆跡で書かれてありました。切止から3センチほどおとりに煤竹の色変りがあり、その景色を髻の元結に見立てての銘と拝察しました。

元結とは髪を束ね髻[モトドリ]を結う紐・こよりのことです。

・君来ずはねやへも入らじ濃紫わが元結に霜はおくとも 『古今集』693

元結は明治4年(1871)の断髪令まで日本人のヘアースタイルであった髻になくってはならないものであり、髪を扇にたとえるならば要のようなものでした。

元結の素材は組紐・紙こより・麻糸など様々で、これを作る職人を元結扱[もとゆひこき]あるいは元結師、販売する店を元結屋といいました。

江戸時代には元結にもブランド品が登場し、わけても元禄年間の文七元結は江戸を中心に名を馳せました。これは美濃の紙漉き職人桜井文七が信州飯田に招かれ制作したもので、江戸に卸問屋を設けて販売した人気商品です。

このブランドは従来のものよりはるかに丈夫で美しい光沢があったようです。

現在の飯田水引は元結作りの副業であった水引作りを断髪令以降本業としたものと聞いています。

茶杓に「元結」の銘をつけた数寄者は薄れゆく元結の記憶を懐かしんでの銘なのでしょう。

文七元結といえば三遊亭円朝(1839-1900)の作といわれる落語の演目を思い出しますね。落語では元結[モトユイ]を江戸弁に訛り[モットイ]と読みます。

明治22年円朝五十歳で初演、一席物で以降はあまり演じなかったようです。

文七といっても桜井文七とは全く関係はなく名を借りただけで、鼈甲問屋の奉公人文七とお久という親孝行な左官屋の娘と夫婦になって元結屋を開くというエンディングから文七元結という演目題になりました。

私はかつて「折々の銘」夕鶴において、「銘の幅を広げようと企むとき、民話は未開の宝庫・穴場となるはず」と書いた覚えがあります。

思えば民話に限らず、落語の世界も銘の取材には一興ではないでしょうか。

落語「文七元結」は大作のため、あらすじは「Wikipedia」にお任せしましょう。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E4%B8%83%E5%85%83%E7%B5%90>

この噺は博打・借金・身売り・身投げなど悲劇のキーワードが連なりながらも、登場人物に誰ひとりとして悪人はおらず、人々の情により個人の弱さを克服し悲劇を回避する噺です。

生きる道を人情と心意気に求めてきた江戸庶民の姿が新鮮に感じられます。

以前からあった噺を円朝が手を加えたようなのですが、出典は定かではなく中国の話ではないか

という説まであります。

この演目の成立には興味深い歴史的背景が隠されています。

東京と名を改めた江戸に薩摩・長州出身の役人が闊歩する時代、江戸っ子の心意気を示そうと円朝が作り、明治新政府の要職にあった西郷従道らの前で演じた噺だったのです。

そういえば、娘の身の上がかかっているにもかかわらず五十両という大金を「一旦やった金はみっともなく受け取れねえ」という江戸っ子の性分をことさら誇張している点など成立の事情を物語っているのかもしれない。

円朝は本名出淵次郎吉、勿論湯島生まれの生粋の江戸っ子です。高座を降りるとなかなかの風流人のようで茶の湯にも通じ、新宿の私邸に茶室・枯山水の庭など自ら設計したそうです。その他、華道・聞香・和歌・俳句・書画など多彩な趣味をもち、山岡鉄舟・由利滴水などの文化人、井上馨・益田鈍翁などの政財界人と交流がありました。井上邸の八窓庵茶室にも招かれており、茶の湯の匂いのする人物のようです。

この噺は後に歌舞伎・浄瑠璃にも採り上げられ、日本人の人情好きを物語っています。

人情は庶民の世界にとどまりません。「武士の情け」という言葉があるように武士の理想像にも強さのみならず情け深さが求められました。多くの能や歌舞伎の例を挙げるまでもないでしょう。思えば世の中の仕組みが複雑になればなるほど、人間関係は法律や契約書など明文化された約束事が重視され、人情に反しても違法でなければよしとする風潮が横行してはいないでしょうか。人情を幼稚な戯言のように軽視されては悲しいですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~